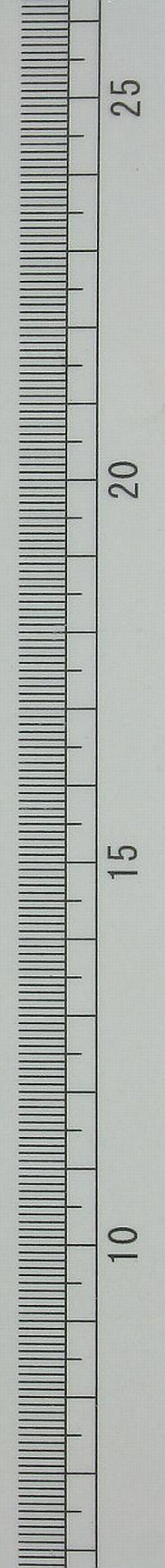


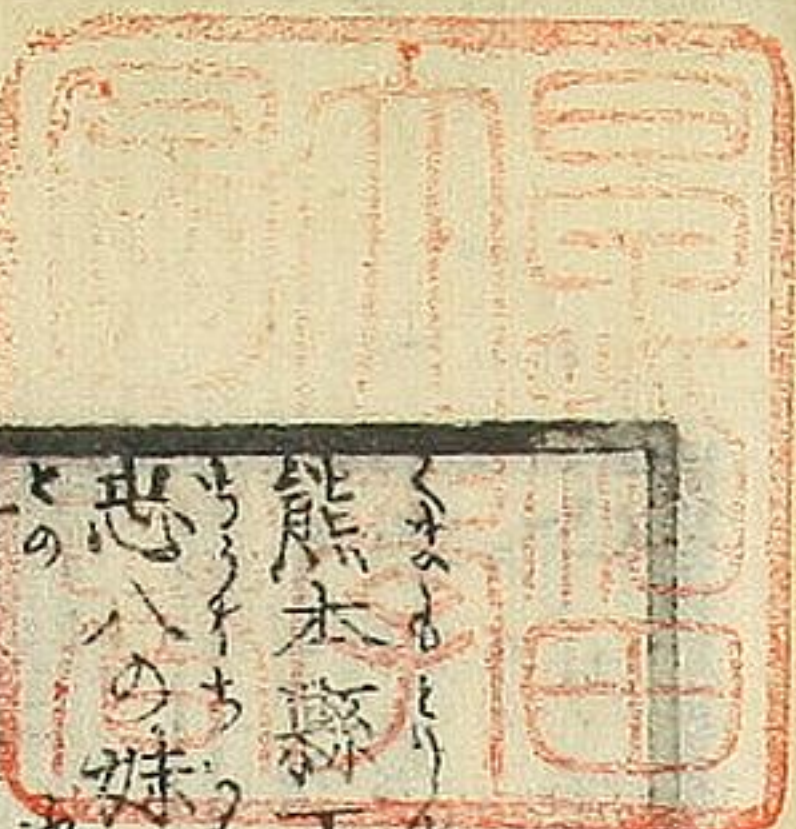
孝貞  
節烈

岡田霞船編  
近世名婦傳

下

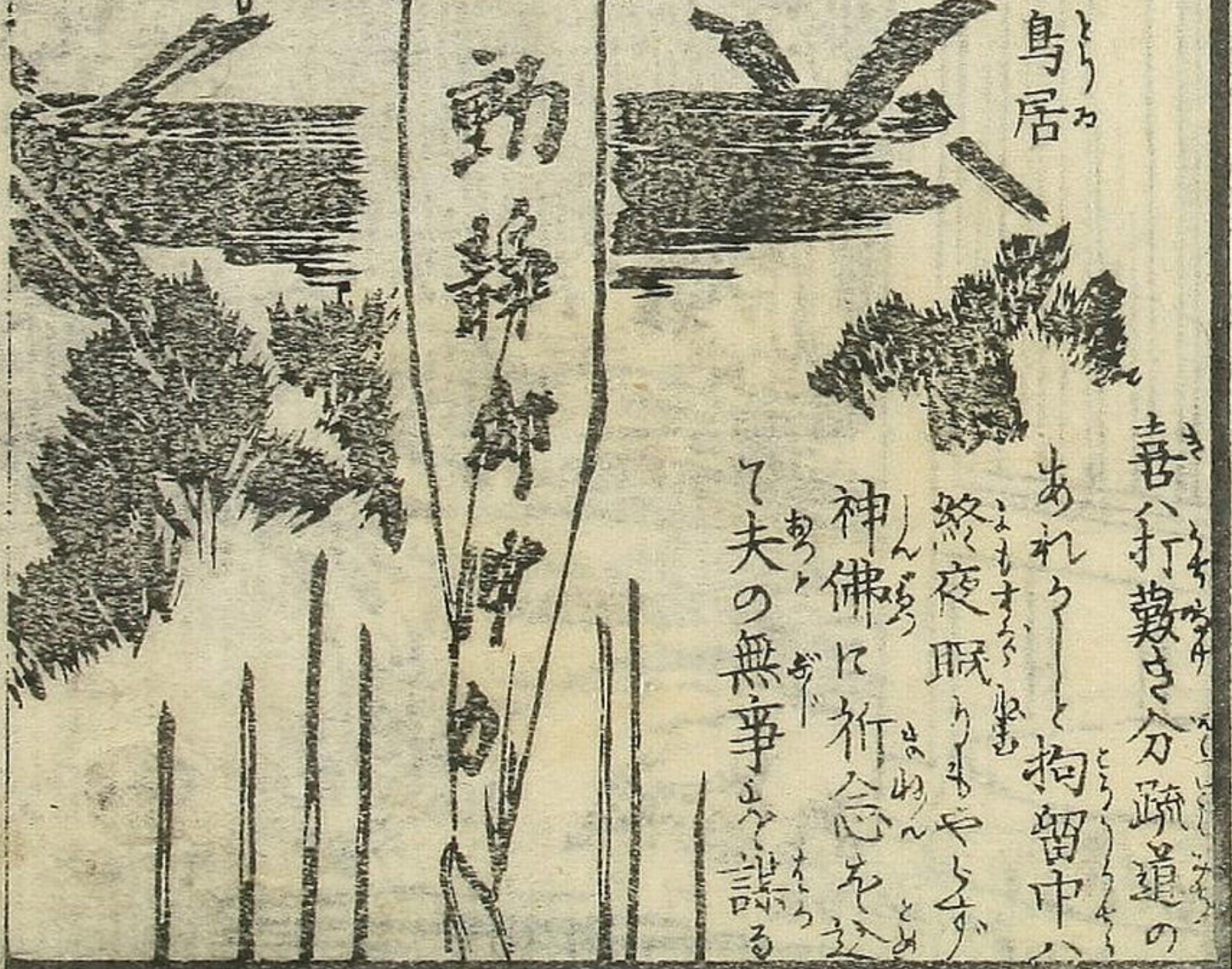
柳田文庫  
文庫11  
A1700  
2





阿部於伊喜傳

熊本縣下第一大區二小區中尾村なる鳥居  
 忠ハの妹とあるか幼き時より武術を  
 好み又文道は志ざり婦女子に稀  
 なる義氣あれば土地での評判も  
 高かりし阿部景器に嫁し其  
 後ハ又も歌道に心を寄せ最  
 睦しく暮す裡夫景器ハ常  
 々他縣の人と交り屢々我家に  
 止宿あど致さざるより縣廳にても  
 目を付られ不審の事と拘引て  
 嚴敷に問せられし時妻のお伊



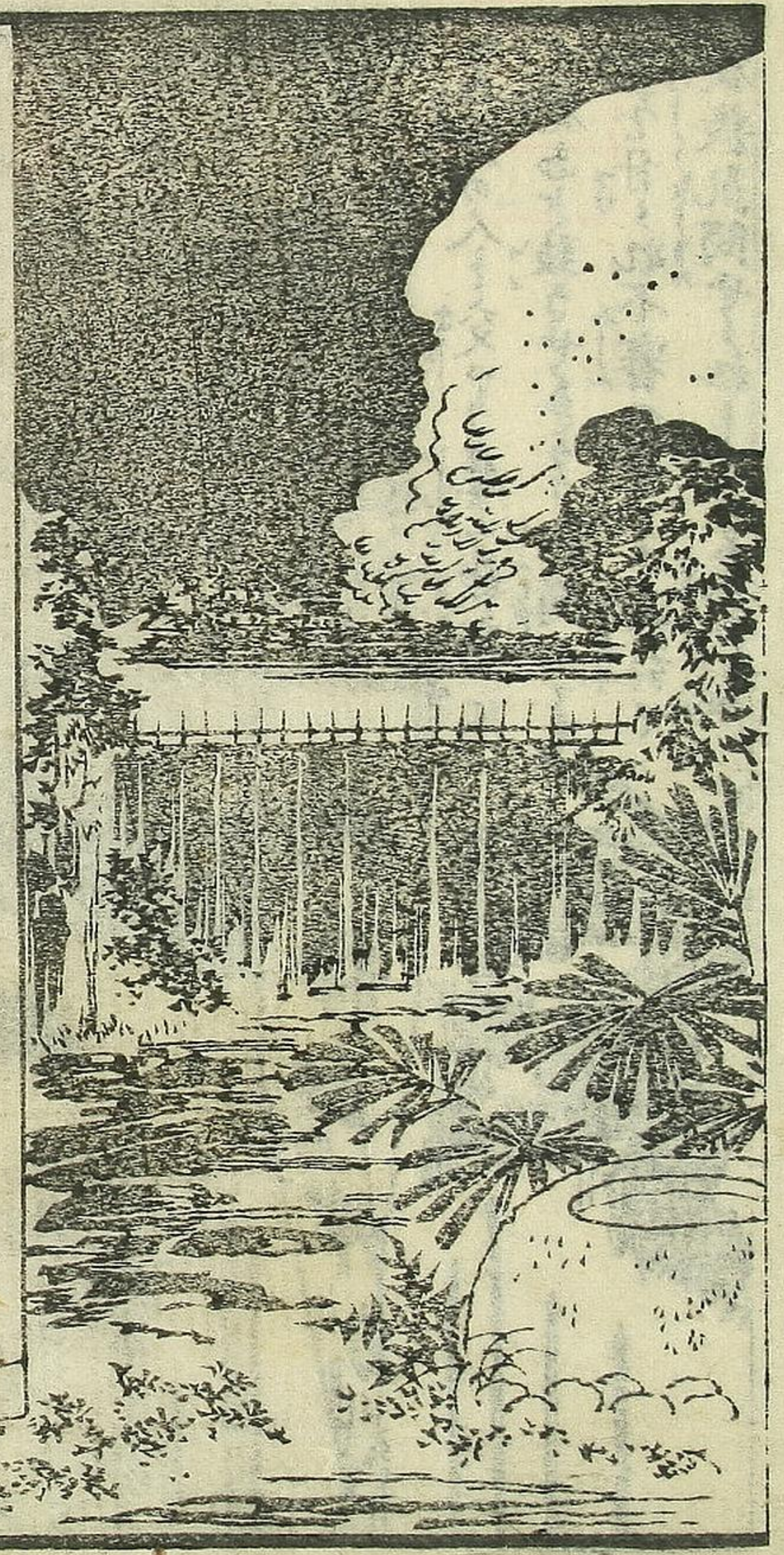
喜ハ打敷き分疎道の  
 あれくしと拘留中ハ  
 終夜眠りもやとす  
 神佛に祈念を込  
 て夫の無事を謀る

文庫11  
 A1700  
 2



<48-8385>

折柄者知ぬ男が裏口に  
佇み居られバ



打點頭儲とて夫のあはぬ  
を知り窃盗の

伺ふ者なんよんハ賊ニ非ず

共斯る族



の立居るが今回の嫌疑も受あり  
先引捕へて官に訴へ

夫が冤罪を解くと思へバ静かぬ伊喜

女ハ立出て其姓名を尋問に返答もする

曲者ハ目散に逆行を遁ハせ

追すが何ぞ捕へ引括たるが曲

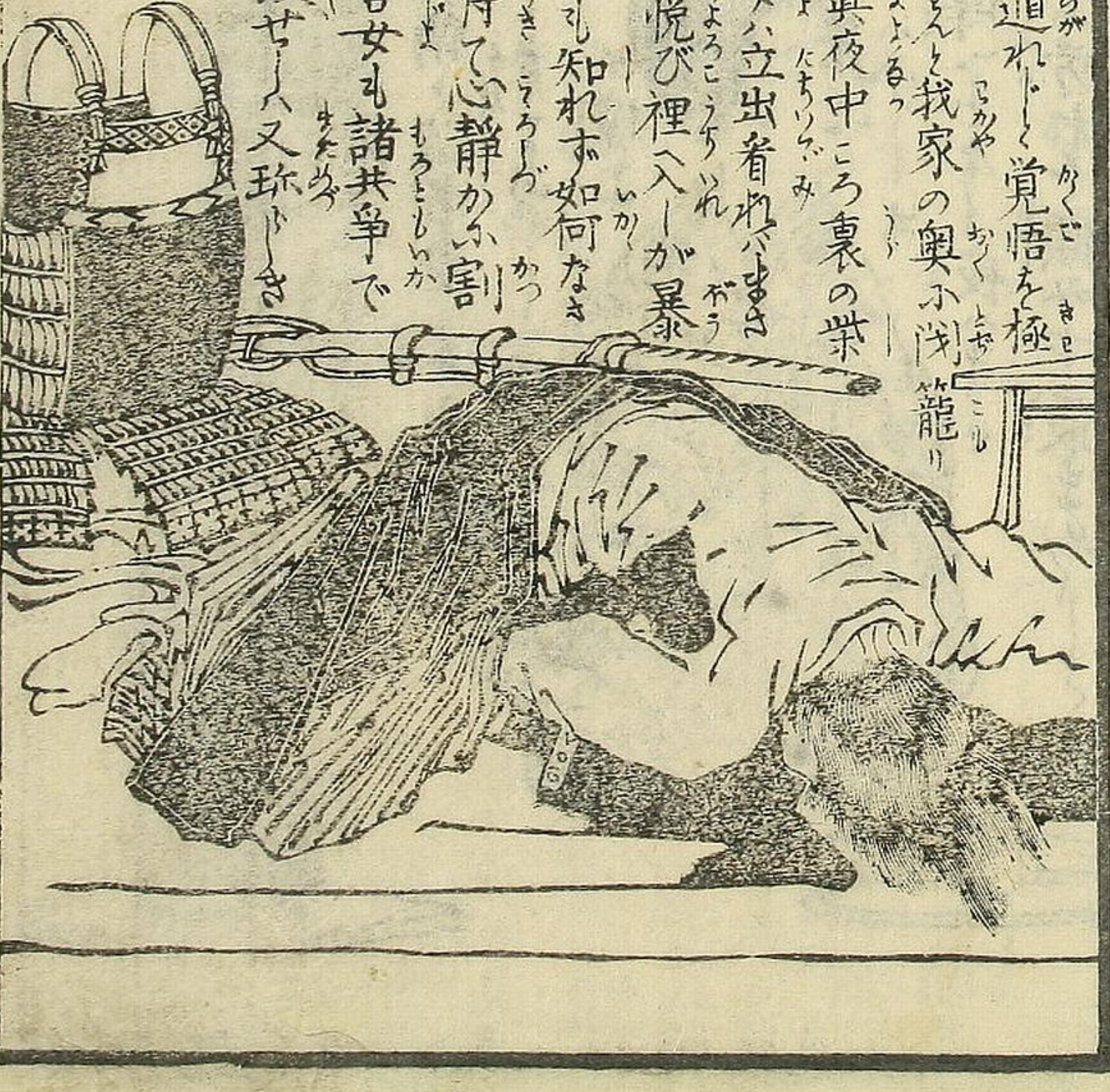
者迎も一生懸命力に任せ振拂



互ひの力不曲者に袖七きりて逃失たれど伊喜女八件の袖  
 を持有し次第を云々と縣廳へ訴へ出たり掛りの官吏も  
 感賞せられ其潔白を推されて景器の嫌疑も忽地解  
 無事に卒夫の免されたるに伊喜女八稀を列に婦を  
 迎其評判のいよ高し然るに其後夫の神風黨不  
 一味あり屢々密議の席にも臨めバ伊喜女八深  
 是を歎き諫め幸も度々なれと早速判  
 にものりといわれ今更詮ある事と諦め  
 千々に胸をバ痛めし明治九年十月  
 六四日の夜半過上野野堅吾を始とて暴  
 徒ら各所へ乱入させしが或は討れ又八捕  
 縛も成るるあり然共夫の生死も分らず其風

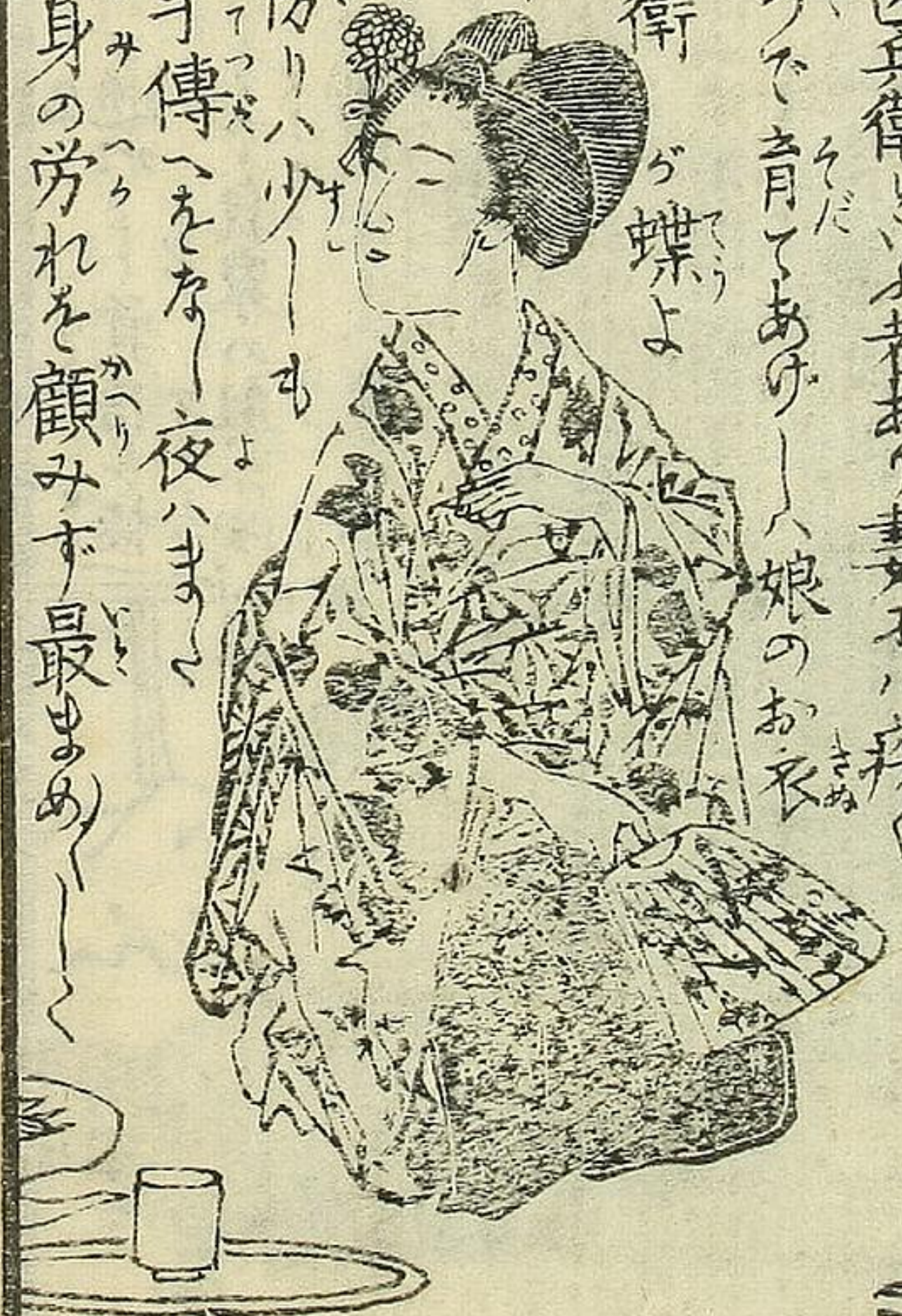


聞の區々なれど不詮罪科の道れど覚悟を極  
 めて只一人り夫の菩提を吊りんと我家の奥小浅籠  
 着經の外あがり其月末の真夜中ころ裏の業  
 折戸を叩く付て伊喜女八立出着れはま  
 夫の景器仲すむ体にも悦び裡へ入加暴  
 徒の身の上今も討手の向ふも知れず如何な  
 んと猶豫を景器へ徐々座付て心静か不割  
 腹致しぬ是を着るより伊喜女も諸共争で  
 夫に後れど續ひて生害致せんと又珍しき  
 烈女にこそ時小年二十六  
 夫人の亡魂もよよ世かけ  
 俱不渡らん三途の川上



藝妓於衣傳

頃ハ明治の始めに西京東山の傍りに住  
 一最も貧しく世を渡る其日々の活計  
 細き烟りの煙草屋に甚兵衛とよ者あり妻あり疾く  
 先立れ男後家の手一つで育てあひ一娘のお衣  
 貧しき中も其兵衛が蝶よ  
 花よと愛しみ育て  
 甲斐も有磯海深さ  
 御恩とお衣の父の傍りハ少くも  
 放れず晝ハ家業の手傳へをなす夜ハま  
 父が手足を揉み我身の勞れを顧みず最もめ

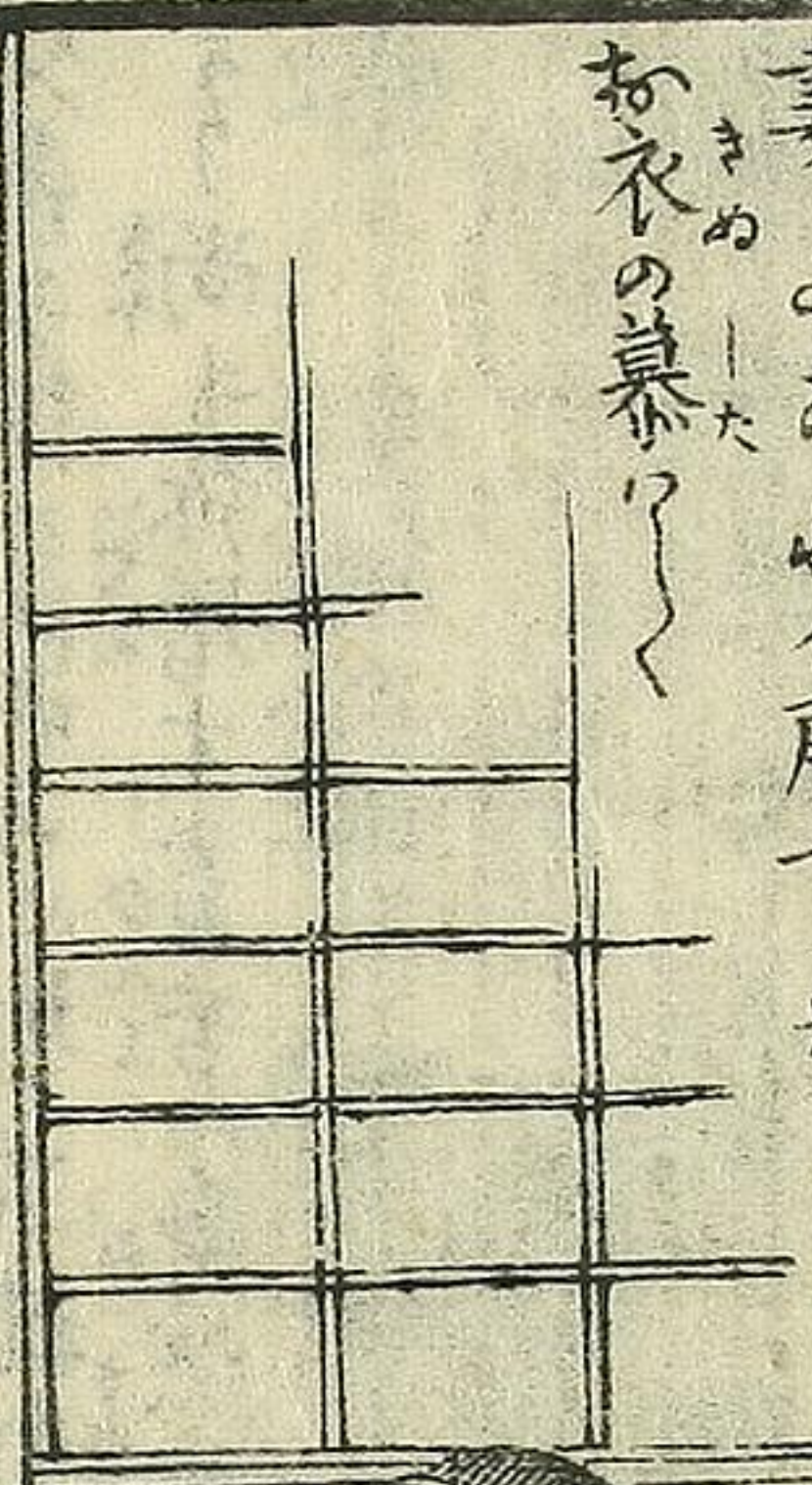


仕へる小く世に珍敷孝行娘と其頃評判の高かりが  
 父甚兵衛ハ風邪の心地あり迎打卧たるが病根となり重き  
 尚も弥増す貧苦の身然共日夜看護に怠らぬ其孝道を深く  
 感得て金銀衣類を度々贈り其身も折々見廻り杯する男ハお衣が家  
 の接近小住も商人に藤七とよ者なるが甚兵衛親子の身に取り入  
 地獄へ佛に逢へ如く其悦びハ物に譬ふんマウもかく然るに甚兵衛の命  
 数尽たる少や拘らぬ旅小赴きければお衣の悲歎ハ方々ねと斯である

可事ありね野辺の  
 送り濟せしが二八  
 の春小藝妓とあり  
 多くの客より愛  
 顧を受ても孝

行娘の藝妓あり近日々客の絶間なく  
 ますく評判の高さ不付藤七  
 迎も相替ふ酒宴の席に招  
 さもしく俱小愛顧に致せが  
 其身もいづれ定まり  
 妻ささあねば藤七ハ頻りに  
 お衣の慕い

然共斯くと言出してハ以前の



湯水の如く撒  
ちりて  
浮れ

来る男ハ九筋  
 武士  
 大森  
 何某と  
 不者  
 ちが未ハ  
 ハお衣を  
 捕へ

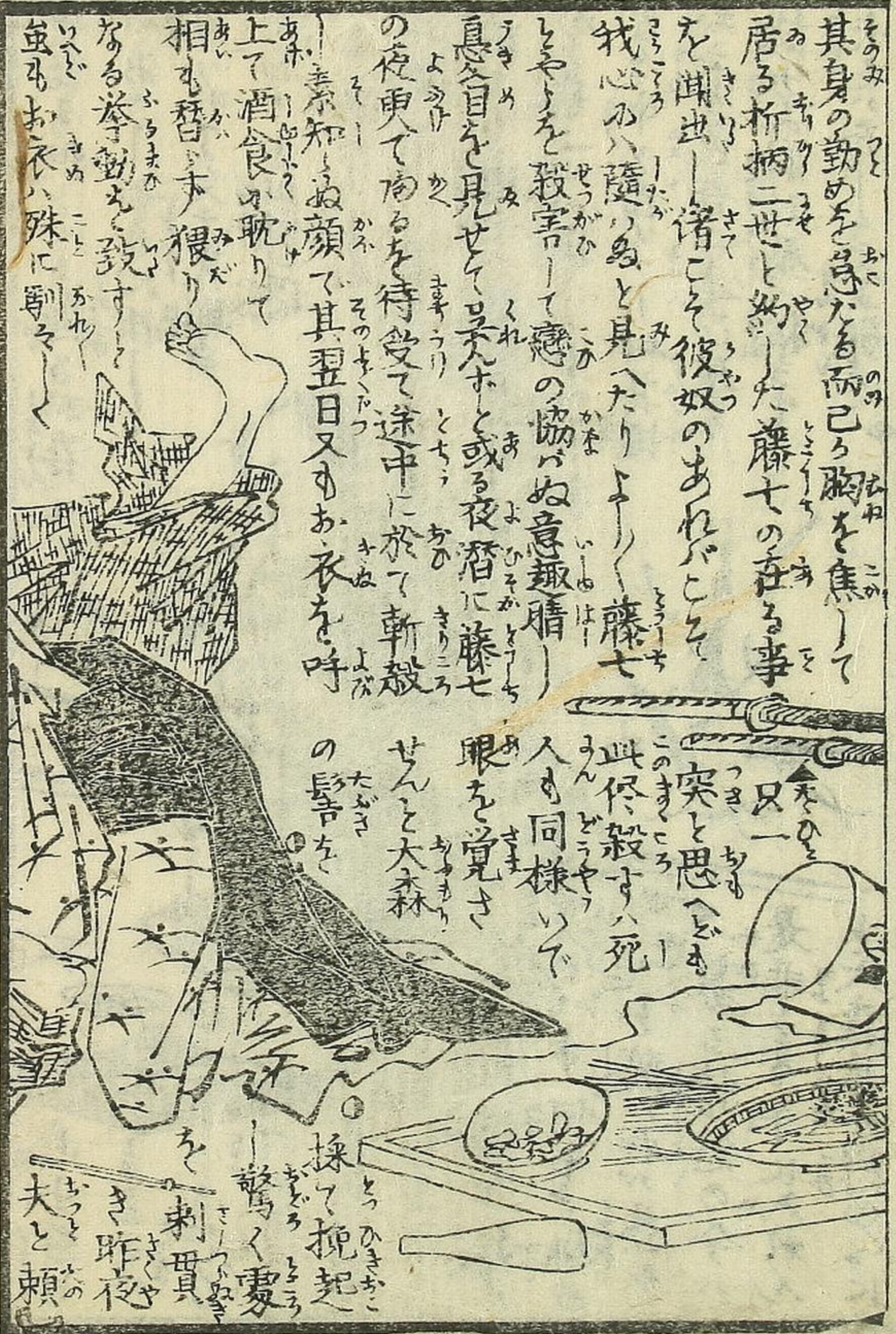
世話も何とやら斯る不存  
 のありしゆ心附し  
 思ひれ入テ更恥る  
 処ありと思ひ返  
 居たりが  
 お衣ふ  
 於ても藤七が眞實のある處  
 かり慕ふ心の通しや何時割  
 ちなき中とありしが其頃  
 お衣が色香の迷ひ屢々  
 諸方の料理屋へ招き  
 夫もハあしハ金銀を



武士道に  
 あるま  
 行ひ  
 杯の宴々  
 あねバお  
 衣ハいよ  
 礼儀を乱  
 ず何ぞ挑め  
 随ハねバ益々  
 募る情慾の今ハ  
 是非とも手に入らん  
 と大森某ハ戀ゆに

其身の勤めを怠らざる而己ら胸を焦して  
 居る折柄二世と約した藤七の在る事  
 を聞出し諸こそ彼奴のあねばこそ  
 我心の八随い多と見たりより藤七  
 とやとを殺害して戀の協はぬ意趣暗し  
 息を自を見せせと日天おと或る夜潛に藤七  
 の夜更で向を待受て途中に於て斬殺  
 素知ぬ顔で其翌日又もお衣を呼  
 上て酒食を耽りて  
 相も替はず猥りて  
 なる拳動も致す  
 魚もお衣ハ殊に割る

只一  
 突と思へども  
 此終殺す八死  
 人も同様い  
 眼を覚さ  
 せん大森林  
 の唇を  
 採て扼起  
 驚く震  
 刺貫  
 き昨夜  
 夫と頼



毎もに看りて機嫌を取り  
 あくま酒を勤めに  
 色に濁れ大森林をなれ強  
 得ず先分酔を催せしお衣の膝を枕に  
 為て前後不覚不眠り一をお衣ハ篤と見定めて



思ひ知れよ力  
 七殿を殺せ  
 一確に証  
 後水居て教りん人死出の山  
 三途の川も俱小越らん

隠し持たる  
 懐籠る手  
 早くすなり  
 と抜放ち



後水居て教りん人死出の山  
 三途の川も俱小越らん

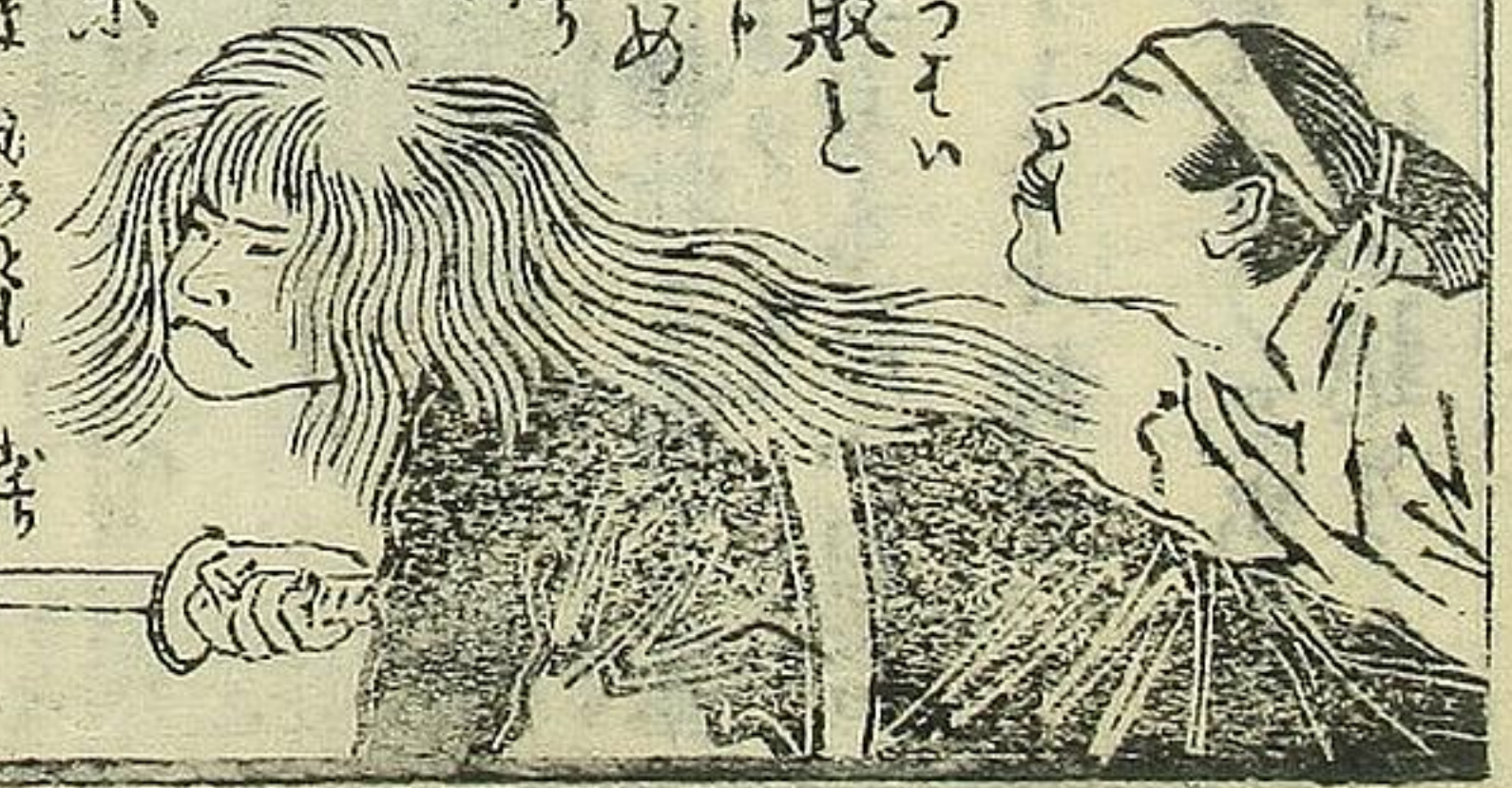
川瀬於富傳  
十九日越後  
長岡の戦ひ  
小官軍の攻撃最も激烈



慶應

四年五月

奥羽の諸兵一敗し  
成り藩主を殆め  
城中の婦女八柄  
堀に遁れ八十里  
越より會津小  
落る此際富女八侶俱不落  
んと彷徨出たるが女小  
稀なる武術小達一力  
量さるも衆小



越後膽力男子  
不獲り  
者多飛玉の中  
を者共甘茶茶袍  
烟小紛れて遁れ出  
心不乱小駈技々々  
見附驛をバ過んと  
す折柄一個の壯士が  
候の官兵小取圍まれ  
戦ひ危く見へけれバ  
富女八帯  
大る一刀を  
拔き疾く  
馳出矢筈  
小一個を斬

て捨其余ハ四方  
小引受  
身縦横當る  
官兵四方小外失たれバ富女ハ  
不つと一息付圍まれ居たり  
壯士を看るより其方ハ弟の隆  
言さるやと声けり  
此方も驚き這ハ姉上小如  
何かれ斯る戦地小在する  
や厄時も疾く落延た





其れが... 某一幸八姉... 在す由今朝確小聞... 後日待て免も南も疾々  
 上か危なき處... 此場ハ落れれと姉を励ます隆吉が最期の一言聞  
 をお救ひ下され... 小付富女ハ胸も張裂はうり須臾詞も無き折柄前後小  
 九死を出て一生を... 官兵の押寄せ敵の手小掛んすりので割腹して  
 得た多れ共神魔の... 相果んと短刀すりと抜より疾く腹小突立ち  
 如く重傷を... 廻りすを苦痛させと後より富女ハ弟の  
 受落行事も... 首打落返す刀小其身も又咽候小  
 恟々此... 刃を小押當か切先白く差貫  
 雲も苦... 重あり  
 骸小打  
 て果

形状るれ... 富女ハ摺... くる物を撫下... 涙を拭ひて云... やう其方を捨... て妻の何國を... 當ふ入り落んや... 俱小自害を致さんと覚悟の体小... 隆吉ハ姉の自殺を押し止め... そのなか... 其ち歎き去る事なめり... ソノ兄上ハ與坂口... みて勝負を決せ下

小け此際十二年十一月なり

下七

布施於糸傳

頃ハ慶應の事ハ一々江乃蒲生  
郡上森村小代官役を勤めし布

世に仙左衛門の妻あり一が夫の横死を遂たるハ深き仔

細のあゝあんとするが勇氣のあれハ歎き

悲む其中ふり夫の無念を暗きんと

種々小心を碎きしより敵きハ

夫と見認し立向ふ可き訳

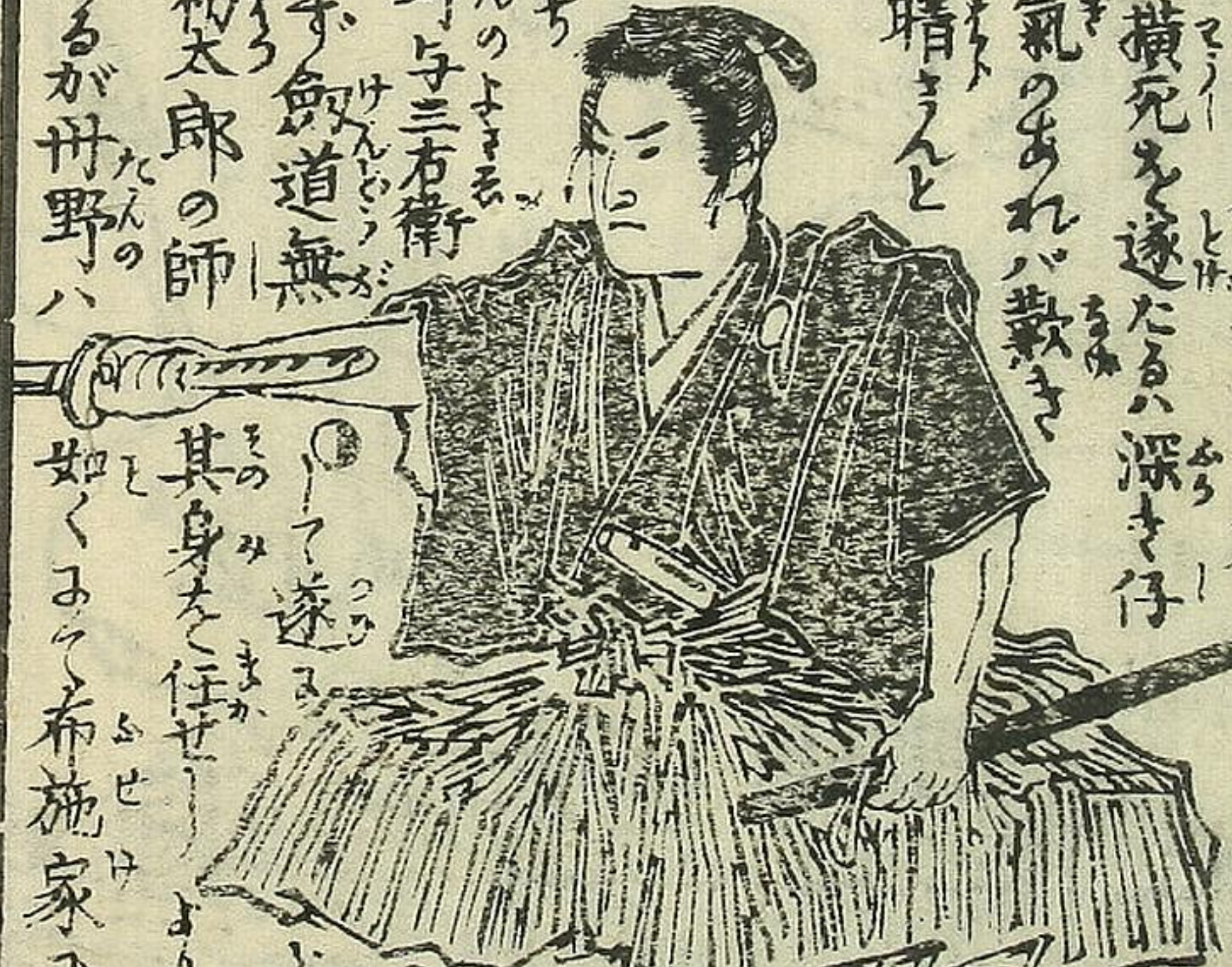
亦も行ず如何とせんと措きし

其頃最上家小抱へられたる丹野与三右衛

門と力量勝れ而已の剣道無

双の達人あるハ糸ハ子息初太郎の師

と頼み武術修業をさせたるが丹野ハ



御前の吉事を思ひ出

して考うれば妻も茲ハ

標を破り一時

浮名を流す

共丹野の手を

借り敵きを

討ハ其後逆

ハ尼と成り穢

名を雪ぐが宜

しと心を決

其身を任せし

如くみる布施家小計り寐泊

忽地茲不

情慾起り

醉は紛

言不觸れ挑めど糸ハ程能言做

道れて居一が後ふハ手強く迫る

みそ或る日お糸ハ情々と考へ

見れと初太郎ハ幼年の

言と云其上の糸ハ病身なれば一眇詮成

長の上るても敵きを討すハ覺束ある今又

丹野が無体を戀慕を耻かめるハ易けれど強面をさハ此後ハ

如何ある拳動をすやも知れずと思ふ不付ても昔ある常誓



りて我気随暮々居

或る夜お糸ハ起直

寐ハ丹野を揺

起今更詞を改め

てお願ひす

も如何あれ共

妻ハ夫の死

をれハ今

執權下

威を震

宮田邊左

衛門が

事ハ一と以前夫が勤役中裁判一訴訟を不正と云  
 又ハ賄賂を貪り一と世間不悪評を言觸せ  
 も己れが威權を震へん 爲め夫が引  
 替夫ハ至つて膽力の  
 無き者也 宮田の  
 流言ハ心の乱れ  
 者あるハ入水  
 致して果た  
 後も種々  
 なる虚説を  
 を聞度毎小妾  
 付ても貴君ハ 劍道無双の事をバ敵き



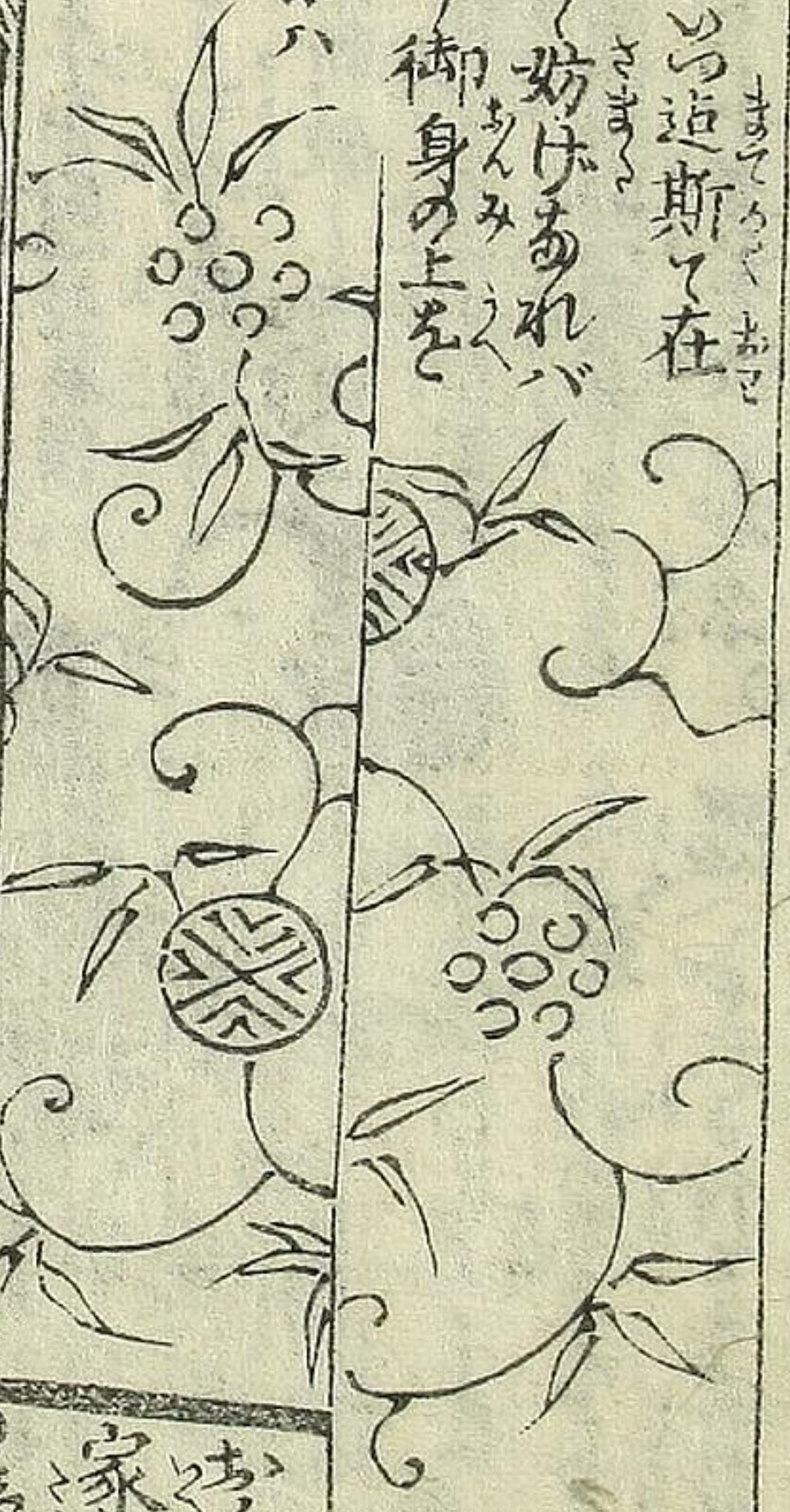
小丹野を再三伏拜  
 引替て丹野ハ最早  
 本夫の如く我終氣  
 隨増長あり日夜酒  
 食ハ奢リを極め布施  
 の家財を自供はせ共  
 小直事と云ふは 自供之  
 みる稍共すと云ふ

宮田を討果一亡夫や妾の無念を晴  
 捕へ打擲する事屢々  
 一給へと言ふが袖より涙押拭ふ一伍  
 糸ハ情を考へて或る  
 一什を聞くよりも丹野ハ大言ひは  
 日丹野ハ打向ひ  
 驚き 諸貴女之夫と云ふハ  
 斯る  
 事して死あれハ然ハ拙者討果  
 此度無念を晴させやせん必ず  
 案ト給うるとお糸を慰め其後ハ  
 宮田ハ他行を祖ひハ或る夜帰り  
 先待受て只一刀ハ斬殺一夜更ハ  
 密と立帰り生血の付ハ大刀を糸  
 の眼前へ投放一宮田を討取来り  
 物語りて驚き一か姿を改め糸



身を願ひまう  
 夫の此  
 早本望  
 思へハ夫子付ても貴君ハ妾

の如き嬌婦は迷ひの道斯く在  
 する時ハ立身さるる妨げあれバ  
 妾の事ハ思ひ切り御身の上を  
 慎まれよ其替りハハ  
 貴君の為ハ山の



麓小家作を建  
 田地を求めた其上江戸より美女を呼ぶ妻と  
 定めて進寸程小妾の事ハ今日限と思ひ通つて  
 給われと道理を分て論せしは尤暴無頼の  
 丹野をれ共お系が切なる心も感し其意は  
 任したるふよりお系ハ許多の金を費し  
 彼集の上お系ハ弁を巧みし

法の奉動  
 為す小付  
 家迎も丹野  
 の為ハ潰され

家作の落成を急がす折柄家禄の  
 奉還金下附の由へ水口藩士ある  
 兄山取の元預けしを丹野ハ  
 聞知りて大ひ小憤り隠  
 する心の  
 憎しとお系ハ  
 を捕りて打撲  
 大因人のとわ  
 其れを最りが滋賀縣  
 早汝ハ味の赤東京上幸裁判所へ送りとなり屢々御調への上謀殺を依り重  
 忘れさ重刑に成る可きを丹野が兇暴著明なるを以て情法を酌量せ  
 〇これ懲役三年に處せられ明治九年の事としてお系ハ畧傳を記す而已

所ろの者等ま云るや丹野ハ尤より大  
 酒を好めハ吐血致して果たりと世間へ  
 云做一葬おハ檢視を受る事もな  
 く各々方もお手数数のなけれ  
 御同意  
 下され

高鍋於淡傳

もつて東京を江戸とよぶ

幕府の御世の繁昌

ある頃本所小住す

旗本にて北條某の家未ある  
嶋八右衛門の女あり十八歳の折柄



中野村なる木村  
庄兵衛が身をも聞此頃  
妻は先立れ幼女の守  
小困る也是非未て  
呉との頼みを僥倖  
木村方小雀に於て  
最忠實又侍けハ  
主人の悦喜大方あり  
す然るも此家の  
番頭なる忠次と  
云るが何時もお栄が  
優れ一容貌は迷ひ

同家の若殿小思ひを撮れ目出度縁  
を結の長の星霜連添ふて入りの子まで  
儲けが程なく夫ハ病死小及び續ひて  
産鬼の死したれ相續すべき男子  
の無きより家ハ忽地断絶したれハ  
お栄ハ悲歎し咽びが詮方なき小  
實家よ返り操を守りて味氣あき夏  
世と入り嘆きつて光陰を送る其中は父ハ  
横死を遂たるよりお栄ハ宛然狂氣の如く  
女もあつても敵を討んと日夜心を碎け共敵ハ  
誰共分りぬ泣き母の實家も上総の國  
東金在小引移り空しく厄介の身あり

言寄る華の屋々なれど  
強面云も氣の毒と品語言倣い通れ  
て居小忠次ハ益々迫るよ赤儀な  
く詞を正  
部屋  
を立去り  
が其後主人  
種々讒言もあせ  
庄兵衛ハお栄の忠實  
地憤  
忠次  
誓め  
お



お栄が

なるを知らる者多し決して  
 其様を事いふとく一向用の  
 ぬ美人の様子も忠次へ又も免や角と  
 諷する事の辱多かれ木村も余儀無く障らぬ  
 様は事を拵へお  
 榮小暇を遣り  
 幼女おれ  
 後を慕ひ朝暮  
 泣伏し居たり愛を引れて庄  
 兵衛が再度お栄を呼んとせしが忠  
 次の事も拒むらおれきをお栄  
 預けて間も無く病ひの爲め

其信實  
 深く  
 我  
 家引取  
 勝手向を  
 打任せて  
 居かおれ  
 容貌  
 の美しく



此世を去り跡ハ親戚の無き者か  
 忠次が家を横領し金銀ハ残さず  
 遣ひ捨家さへ  
 他人は賣度  
 其後逃亡爲と  
 されバ残る幼女  
 の遣り憂ふく是  
 非無き依はお栄  
 引取主人の記念と  
 守り育む仇小星  
 霜を送る裡熊本  
 藩士の高鍋某△

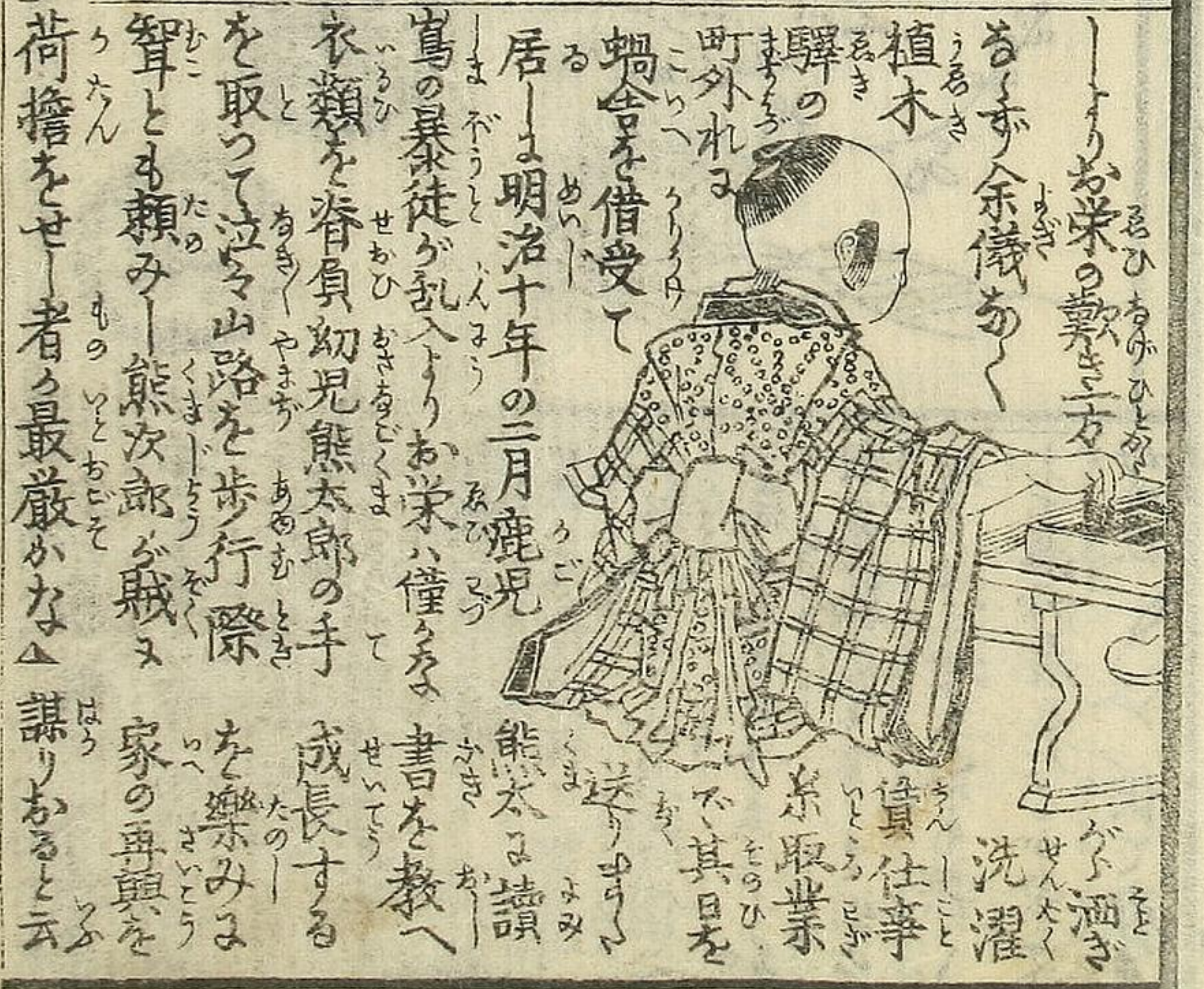
其性至  
 つて従  
 順けれ  
 未ハ嫡男  
 の嫁小しせ  
 夫と云名め尚  
 其時を待折柄  
 明治三年の八  
 月子肥後國玉名  
 の郷より移りて  
 りおれきを熊本  
 藩士

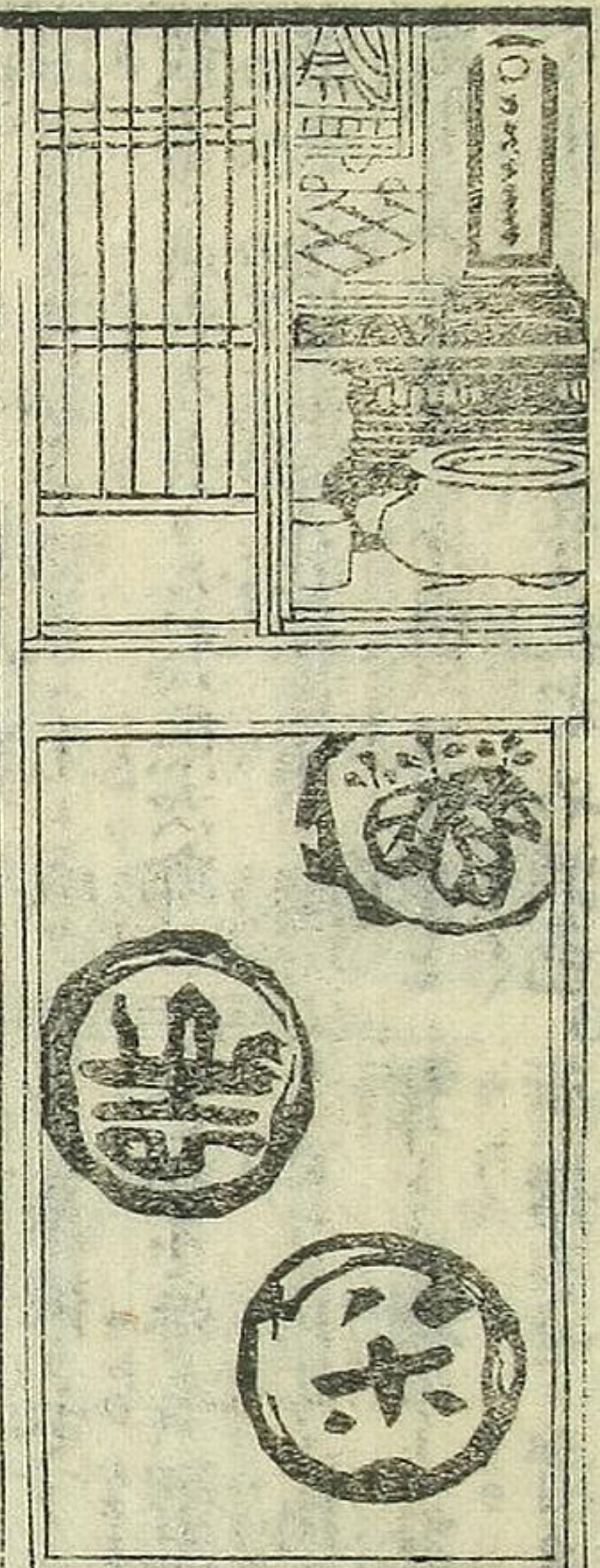


の妻とせしよりお栄の悦し  
 大方あり昔の辛  
 苦を打忘れ樂しく此世  
 を送る裡おれも何時  
 懐妊て安々田方子とを  
 産たるが年まづ若  
 き十六の初産也



り肥立のこもく竟に果敢あ成  
 たりお栄の嘆き一方あるも又も  
 や羨み直愛思ひ跡を残せ乳児  
 を丹精するて育て居る裡高鍋某  
 の老の身の世細ふ病氣が尤も成り  
 敢あく此世を去りたり熊次郎ハ  
 悲歎の涙留敢ず我家の奥に閑  
 籠り泣かぬ人だ中後ハ父と妻と  
 を失ひて心も愛も乱れや酒色





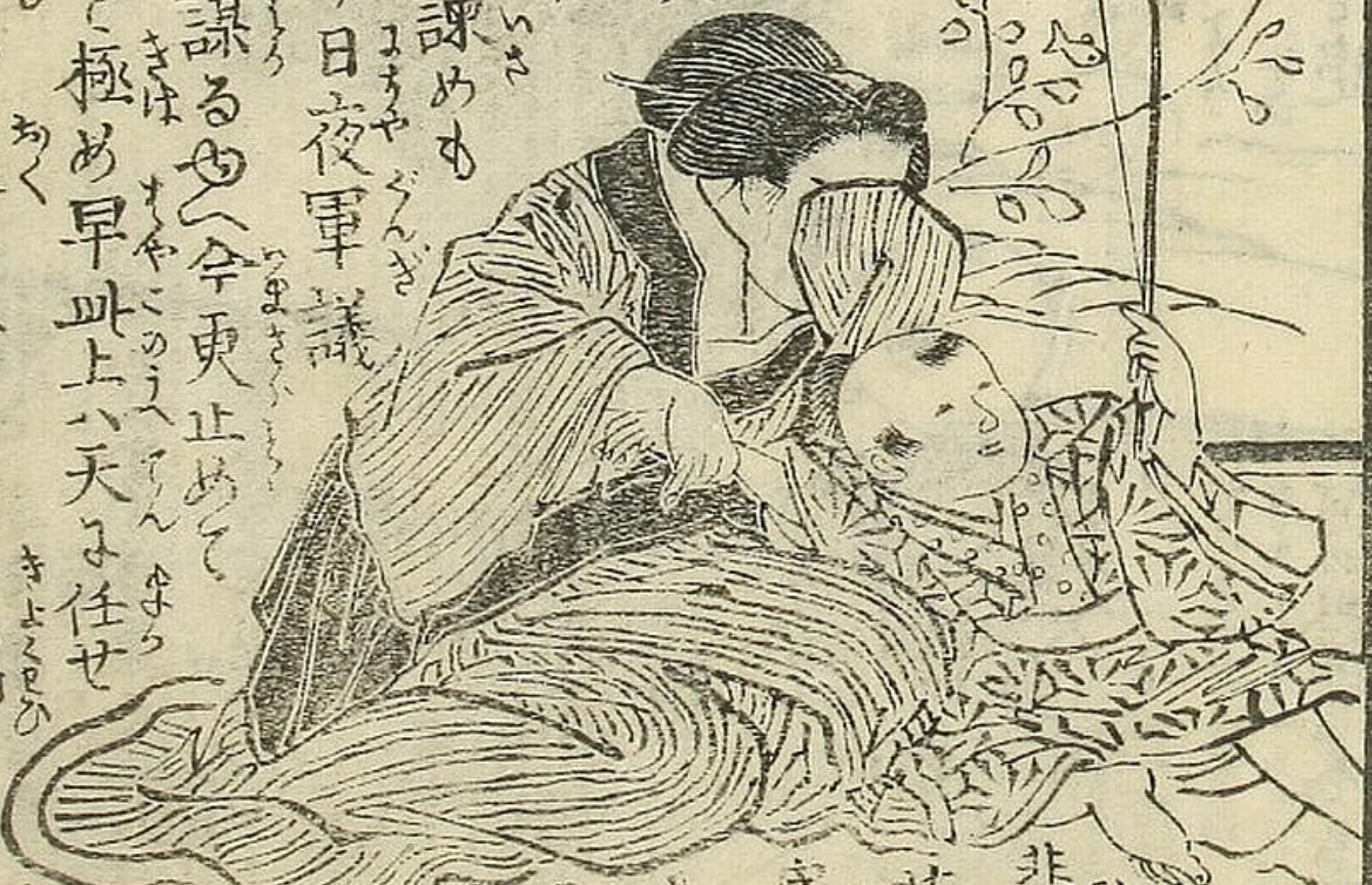
朝倉於婦美傳

明治七年の二月佐賀の暴動あり江藤新平等を始めとして征韓論の行はれざるより私憤を懐き多くの諸事を煽動して



△の江藤新平等義勇等も揚とあり四月十三日小至り夫々御愛刑ある中本夫朝倉尚義も斬罪ありと聞ゆるも其後其後泣伏て誓時正終無かりが此際僅小三歳ある女子ありが母の悲歎を知りて涙の迎りて這廻余念も無くして遊び居たるが余り小母の泣伏て顔

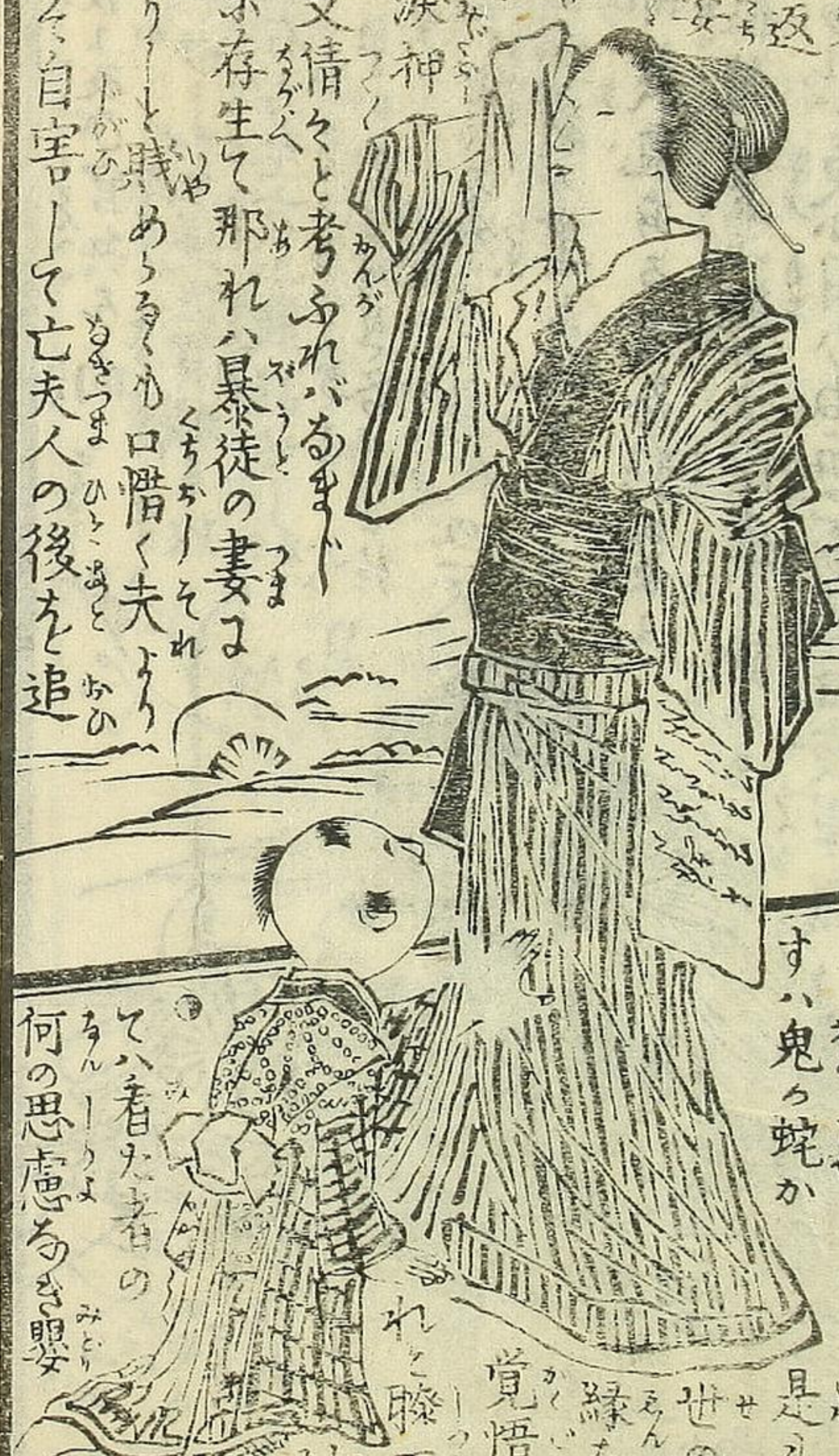
暴發及び官兵を向へて戦ひが地佐賀城も破れ右方左方小散れせし天網争か免る可き各所は於て捕縛せらる外は暴徒の一人朝倉尚義が妻おゆと云るハ貞節義氣ある者あれば其夫が征韓黨小組せし際屢々諫めも為たぬれど更不用ひぬ而已あらず日夜軍議の席も臨みて只管暴挙を謀るゆへ今更止めて詮無しとおゆ多し獨り覚悟を極め早此上天に任せ夫と生死を俱せむやと憂日を送る其うち巨魁



上ねの母の悲歎を察し俱泣る其聲小おゆと云る驚き起上り膝を抱き上乳房を



含み顔も看るや眼も曇り  
 涙の雨も龍津瀬の胸も張列衣  
 計りもて又も悲歎不咽ひ一が  
 思ひ返  
 して姿  
 を改  
 め袖  
 めて涙神  
 拭ひ又情々と考ふればるまど  
 此世も存生て那れハ暴徒の妻よ  
 て在りしと賤めらるるも口惜く夫より  
 寧ろ自害して亡夫人の後を追



歎きか今更未練  
 と氣を励まし頑是  
 あき児を手よ掛て  
 すハ鬼の蛇か  
 親が殺  
 是れ前  
 世の因  
 縁ある  
 覚悟や  
 取つ

何の思慮あるも嬰  
 てハ看た者の  
 下  
 取つ

買途におひて睦ましく添遂るこそ

本望あり夫不付ても世の人か那れ  
 心の亂れ一か又ハ深しハ事故あ  
 つて自害せし杯言ハ云華で此存  
 生て淨世の塵も交ひんや勘しも疾く  
 と覚悟を究め豫て本夫が秘藏せし  
 七首を取出し技放してハ看た者の膝も  
 伏れて余念なく眠り一嬰兒看る付腕も  
 赤びれ眼も眩み又もわがむと平伏て前後正  
 幹泣きうり幾度と無く起てハ泣伏てハ轉び

児母の腕も取離り莞爾  
 笑ふ顔を看ておゆら  
 又も泣計り言出る詞の  
 無き折柄きやつと一声嬰  
 児の泣は驚き疾く看  
 れハ技放したる七首の上  
 共知も余上りや血泣小  
 涙大有様は借ハ妾を  
 励ます為め斯る手癖  
 を受たるか早是退と  
 刺殺し其身も續  
 して自害をせしと云

田丸於松傳

水戸の藩士小  
て町奉行を  
勤めし由  
丸楯之右  
衛門が  
女あり  
父ハ  
攘  
論を



養を尽せ  
孝  
是まで  
隨ひあり  
手負の者の看  
のそあるか  
てあひ  
下ノ十六

● 落行族の多ければ最早防徳  
の術を尽たり此際楯之右衛門  
ハ松子を側小呼近附其方も  
是まで  
隨ひあり

● 到す討  
やと詮  
志願果  
すす就  
て其方  
婦女子の  
事也豫  
て示せし  
間道より  
疾く當地  
を落延よ  
きり連婦女

主張  
藩籍を  
脱して常刃  
筑波山小指籠  
討手の大軍を引  
受戦中ちも松子ハ  
父の傍りを離れず陣  
中小在つて手負の者の  
看護を倣し又ハ寄手小  
當り奮激突戦屢々ありハ  
味方ハ烏合の兵の多く殊小  
弾薬もも竭たれば夜小紛れて

護中を行届せし  
働きの男子も及ばぬ事  
小して斯く父も嬉しけれ共  
最早防戦の協はぬ也翌日ハ  
當所  
京師  
小登り  
て一橋公小事  
實を訴へ然る  
上りて免も角と諸士の決  
議不及び一かれ共寄手の  
尾撃ハ目前あれば半途小  
の幸あり強ち  
笑ひを取る小  
も非ず父が  
詞を聞く  
松ハ女  
を改め  
て這ハ  
御意も存せ  
妾不此処を落  
すといハお情



● 尾撃ハ目前あれば半途小  
の幸あり強ち  
笑ひを取る小  
も非ず父が  
詞を聞く  
松ハ女  
を改め  
て這ハ  
御意も存せ  
妾不此処を落  
すといハお情



急なれハ松子ハ  
脱士小打交り取つて  
返して追散

寄手の逃  
行先々の十二月  
討手をの初旬  
破り  
大野ハ

深き事ハ  
を頼ひ  
始め  
死を謀  
父上侶俱  
妻の  
決心然る

退茲小究まりけ  
れハ諸士ハ残す  
加州の戦  
門ハ降  
伏して  
本意を遂す翌元治  
二年二月の中旬田丸を  
始め諸士の刑せられ  
時小臨み自害をな  
して果一とぞ時小年  
十九辞せ  
数あるぬ  
身もあられト  
死おのる

更おめく何  
落延申さん是非とも  
何國の果  
迫もお供の協ハぬ事なれば此場下  
自害する死已と覚悟の  
体小稻之右衛門  
門ハ思ひ結なる女  
詞ハ感涙鏡の袖を浸し須臾黙然と  
居たり一が指あつて松女云やう左不ど決心  
致せし上ハ予も又何を止め申さん俱小西京  
小上り一ハ目詮術もあふんと田丸親子ハ尚行  
未の事杯を議し其翌日小相成りけれハ筑波山  
に籠り居し残兵ハ百撃て出陣みを破りて上嘉  
小至り利根川を渡りて中仙道不出る此際追兵尤

加州の戦  
門ハ降  
伏して  
本意を遂す翌元治  
二年二月の中旬田丸を  
始め諸士の刑せられ  
時小臨み自害をな  
して果一とぞ時小年  
十九辞せ  
数あるぬ  
身もあられト  
死おのる

日暮の頃飯田所に住居し諸藩へ  
 人入の元締をせし小林某の娘なり  
 父ハ榮耀栄華を極め又音  
 曲を好む者々娘の遊藝  
 を仕込てますり華美を尽  
 せしも満れはる世のありの風と為大事の  
 手違ひより多くの金を失せしもの引續  
 ての災難の家財までも賣代ふし一時の  
 没きを付し者の尚其上るも方法の立難  
 き事ありては娘ハ僅う小十二才あれ共



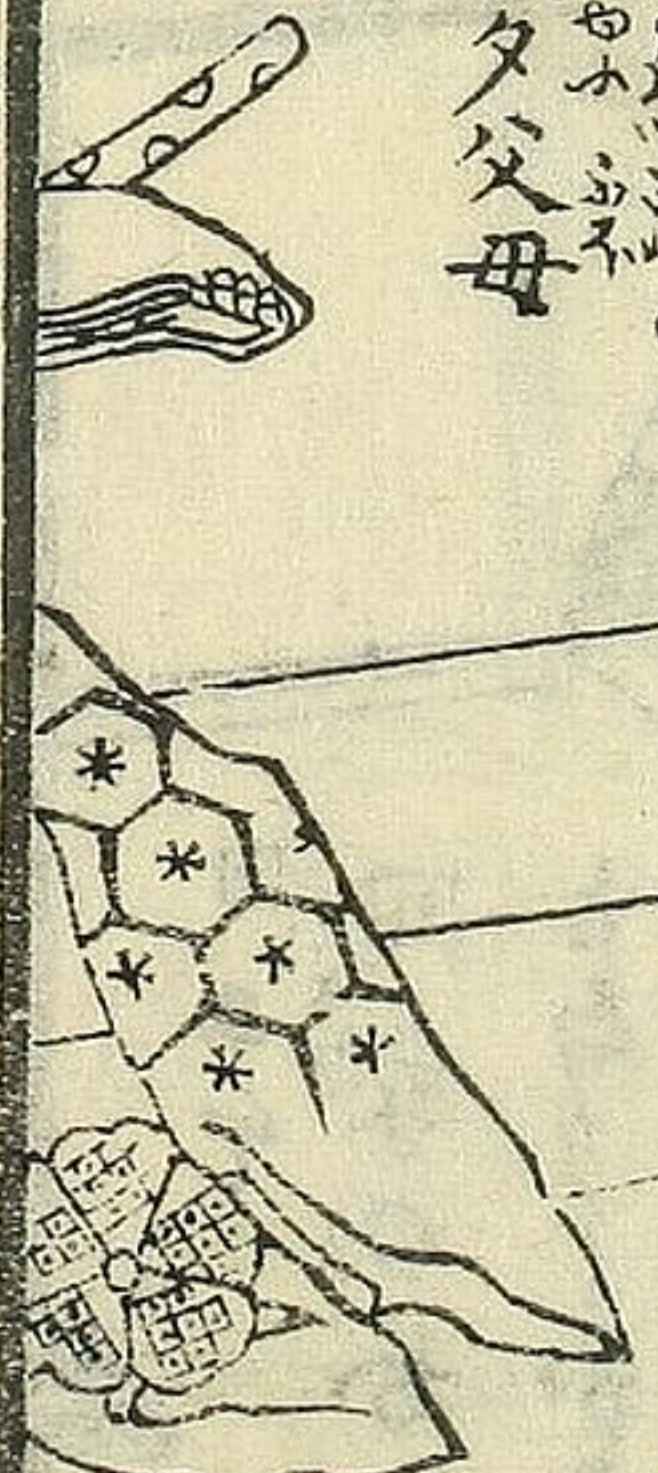
同家のお職  
 性至つてつみ  
 深く且容貌の美な  
 るが如くは尚今その名  
 の大々ある而已し遊  
 藝小おひても妙なり

娼妓繡湘傳



親の難儀を救ふ  
 ため江戸町  
 一丁目の遊  
 女屋金瓶樓  
 の抱へとあり  
 十八歳

極めしより他の娼妓が又及ぶ可とも非ず然共聊う  
 事に誇り朝も疾く起出て他不乱れ姿を  
 見せざる両己う平常無益な名聞を好まず只兩親  
 の安否を尋ねてつと勤の真愛を暗一仇一  
 光陰を送る裡も手元不親の居る訣あり  
 唯孝道の届らぬを真愛事と朝暮胸を  
 痛めて居が其孝心を深く感して金瓶樓  
 の主人ハ繡相の双親をば一め第二人を引取  
 せ二階下ある座敷を貸與へければ繡相の  
 悦喜一方あらず今心の修めれば朝夕父母  
 の機嫌を取りて此上なき樂みと  
 致すより其評判のいよ高く一

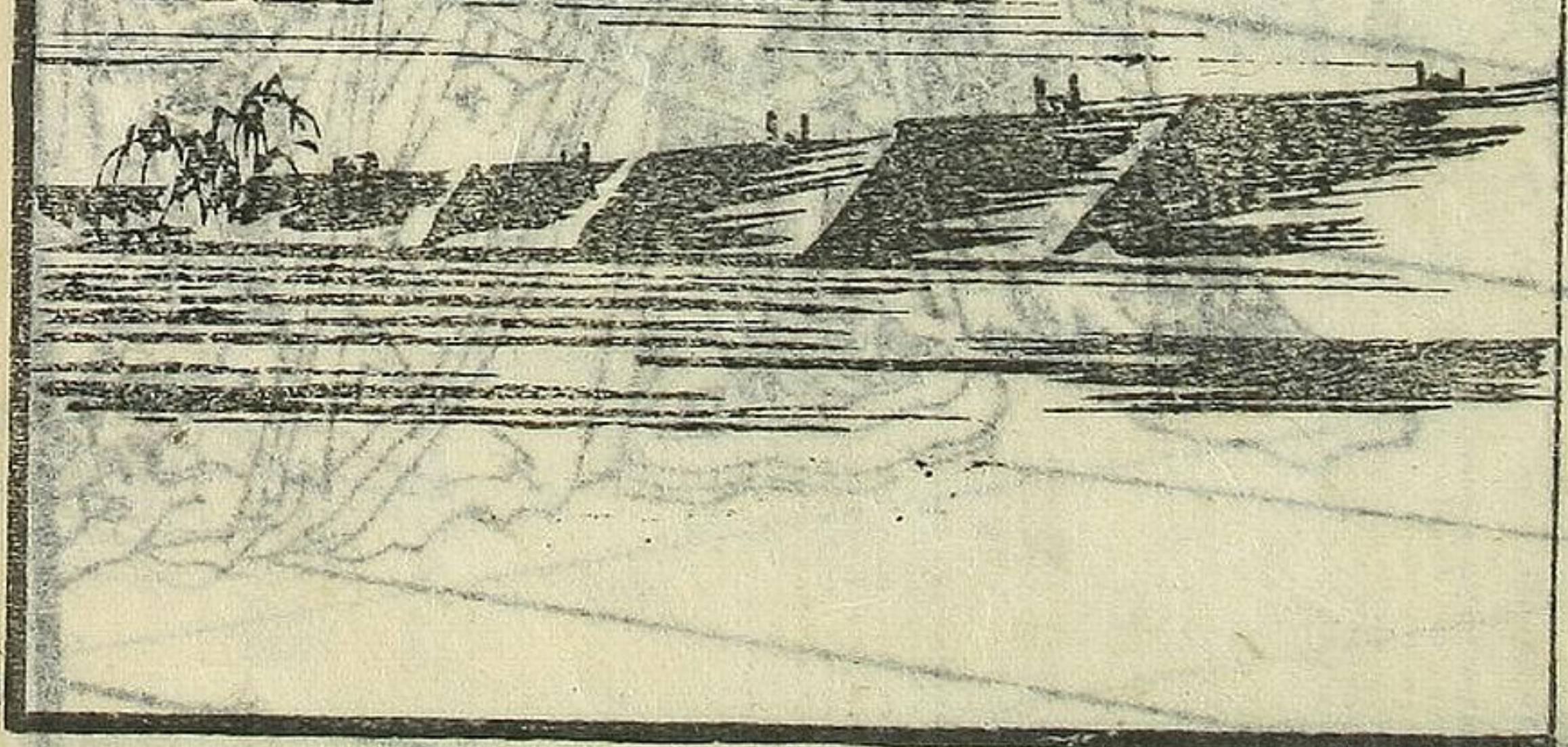


全盛肩をなごめる者あ一然バ  
 高貴の方々も繡相の歌舞音曲  
 をみまか一と  
 望まる方も  
 多く一々  
 日々夜々に  
 客の絶道もなかり  
 一と又繡相の舞臺に  
 出拍子を取り妙手を  
 尽して舞一時八衆人  
 の眼を驚かせ一と  
 其頃同様におひて全盛を極め一



今紫きすく繡湘の上小立難きを知り  
 始終次にありし又解放の後ハ  
 或る高貴の方が妻に世貞ひ受  
 暮し居るも是皆平常孝心の深  
 きに依り斯る良縁を結びし  
 あるが双親を始め弟々  
 下谷龍泉寺町ふ世帯を持  
 せ一時其身ハ夫ハ随ひ遠  
 路の夢にいられ共尚孝  
 養に急りあく文章にて  
 安否を問のしか折々  
 物岳あど贈りも

小室中務高第



下ノ二十

定價廿三匁五厘

明治十三年十二月廿七日御届  
 同 十四年一月卅一日出版

編輯人

東京府平民

岡田良策

神田區神田末廣町土番地

出版人

東京府平民

大川錠吉

浅草區浅草三好町七番地

發賣人

高梨彌三郎

010190530561

